

特集 まつりのチカラ

新型コロナウイルスの感染拡大を考慮して、大槌まつり、吉里吉里まつりは従来どおりの開催を断念しました。関係者の来年にける思いと、このような状況にこそ待ち望まれる「まつりが持つ力」について、過去のまつりの記録とともにお届けします。

例年8月、9月に開催されている吉里吉里まつり、大槌まつりは、新型コロナウイルス感染症の状況を受け、町民や来訪者などの安全を優先し中止を決定しました。各神社における神事などについてはそれぞれの方針に沿って行われます。

「盆正月は帰省しなくても、まつりには帰ってくる」という人がたくさんいるほど、まつりは町民にとって、活力の源として無くてはならないものです。今、コロナ禍で疲弊する中、町民はみんなが集まる事、手を取り合う事も許されないつらい状況にあります。

しかし、東日本大震災で被災した年、大槌町民は力を合わせてまつりを行い、その姿は多くの人を元気づけました。関係者の皆さんは、「口をそろえ「まつりをやりたい、という思いがチカラになる」と答えます。今年の開催はできなくとも、長い間受け継がれ、親しんできたまつりのお囃子や活気あふれる声は、みなさんの心の中に響きはじめています。す。コロナ禍を乗り越え、喜びと共にまた町を練り歩く日は、すぐ近くまで迫っています。



大槌まつり実行委員会 委員長
千代川 茂 さん

まつりは地域のパワーの爆発

実行委員会としても開催に向け検討を重ねた結果、従来の形での開催は見送ることとなり、非常に残念です。観光イベントとして外に発信するお祭りが多い中、大槌まつりは地元の人の中で燃える、地域のパワーを爆発させるお祭りです。人口の約2割が行列を作り町じゅうを練り歩く。そんなお祭りは中々ありません。こうした参加型のお祭りが、大槌町民の歴史であり、町のエネルギーだと感じます。来年こそは「3度目の正直」で大槌まつりを盛大に行い、コロナウイルスを乗り越えた新たな歴史として、また後世に受け継がれ、町が新しい時代へと進んでいくことを期待します。



歴史ある郷土芸能 皆でつなぐ

郷土芸能を継承していくうえで、子どもたちは1年ごとに段階を踏んで技術などを学んでいきます。多世代が分け隔てなく交流する郷土芸能の場は、地域コミュニティにおいても大きな役割があります。その中で2年間も活動の機会が無くなることは大きな痛手です。震災津波の時、拾った半纏や借りた太鼓を使ってまで続けてきたお祭りを、ここで途切れさせるわけにはいかない、とみんなが感じています。何とか力を合わせて乗り切り、次の祭りにつなげていかなければならないと思います。



郷土芸能保存団体連合会 会長
平野 榮紀 さん



本当は今こそまつりの元気が必要

観光客も多く来る大槌まつりとは違い、吉里吉里まつりは地域の中のまつりの色が強く、ぜひとも開催したい気持ちはありましたが、人が集まるリスクを考え断念しました。今回のコロナウイルスのつらさは、ある意味では大震災以上。あの時は、辛い中でもおまつりをする事で、住民が復興へ向かう元気をもらうことができましたから。集まることはできないけれど、地域みんなで乗り越え、来年は喜びを込めた吉里吉里まつりを開きたいです。



天照御祖神社 宮司
藤本 俊明 さん

